

日本人指紋ノ研究 (第二篇)

一、指紋係數ノ人類學の應用ニ就テ

金澤醫科大學法醫學教室(主任古畑教授)

學生 平 井 純 磨

目 次

緒 言

(一) 指紋人種特異性並ニ指紋係數ニ就テ

(二) 本邦各地ノ指紋係數ト生物化學の人種係數ニ就テ

(三) 余ノ調査セル本邦各地ノ指紋係數ニ就テ

(四) 所謂生物化學の人種係數ニ就テ

(五) 日本人身長並ニ頭型ノ地方の分布ト指紋分布トノ關係

(六) 總 考 察

(七) 總 括

(一) 緒 言

指紋ノ種類並ニ指紋價ニ就テハ今更喋々ヲ要シナイガ、今此ニ極簡單ニ記載シテ見ル。指紋ハ大別シテ弓狀紋(Bogen)ト蹄狀紋(Schlingen)ト渦狀紋(Wirbel)ノ三種ニ分タル。蹄狀紋ハ之ヲ甲種蹄狀紋(Radial Schlingen)ト乙種蹄狀紋(Ulnar Schlingen)ノ二通りニ分チ、渦狀紋ハ之ヲ上流渦狀紋(innere Wirbel)、中流渦狀紋(mittlere Wirbel)下流渦狀紋(äussere Wirbel)トニ分ツ事ガ出來ル。我が司法省ニ於テ、犯罪人ノ個人識別上ニ採用シテ居ル以上各種ノ指紋ノ價ハ弓狀紋(一)甲種蹄狀紋(二)乙種蹄狀紋ノ中指頭隆線七本以下(三)八本以上十一本以下(四)十二本以上十四本以下(五)十五本以上(六)。渦狀紋ノ中デ上流渦狀紋(七)中流渦狀紋(八)下流渦狀紋(九)ニシテ、指頭缺損シタ

ルモノハ其ノ價(○)トシ、指頭存スルモ隆線缺損シテ、ソノ價ヲ判別シ能ハザルモノハ(●)ノ符號ヲ付シテオル。然シ以上ノ分類法ハ生物學的分類デハナイカラ、眞ノ指紋ノ分類トシテハ尙遺憾ナル點ガ少クナイ。將來指紋ノ生物學的の見地ニ立脚シタ分類ノ確立セラル、事ハ、指紋ノ今後ノ科學的研究ノ發展上頗ル緊要且重要ナル事デアルト信ズル。扱テ指紋ハ萬人不同、終世不變デアツテ現今唯一ノ確實ナル個人識別法トシテ、犯罪捜査ノ上ニ應用セラレ、更ニ一般社會ノ應用トシテハ、印鑑又ハ署名ノ代用トシテキル事ハ周ク人ノ知ツテ居ル事デアル。然シ指紋ハ個人識別上ノ應用ノミナラズ、今ヤ生物學的二研究セラル、ニ至ツタ。大正十五年六月金澤犯罪學會ニ於テ古畑教授ハ『個人識別法』トイフ題ニテ指紋ノ分類、應用、沿革ニ就テ述ベラレ、更ニ指紋ノ遺傳關係、指紋ト人種ノ關係ヲ説キ更ニ指紋ノ出現率ガ人種ニヨリ相違スルガ同一民族ニ於テハ略ボ一定デアル事ヲ明示サレタ。岸孝義氏ハ「指紋ニヨル年齡ノ推定」、「双胎兒指紋ノ研究」ニ就テ述ベラレ正木信夫氏ハ一萬二千五百六十個ノ乙種蹄狀紋ニ就テ其隆線數ノ出現ニ關スル精細ナル研究ヲ報告セラレ指紋ノ生物學的研究上ニ重要ナル基礎ヲ與ヘラレタ。一方長谷部言人、久保武、椎野、三宅兩氏、小保内虎夫、駒井卓、古瀬安俊、藤井藤藏、兒島三郎、南條博和、吉田寛一、藤田潔兩氏ノ諸家ニヨリテ指紋ノ各種ノ研究ガ報告セラレ居リ、最近ハ指紋ト性格ニ關スル新研究ヤ男女性ト指紋差別ノ研究、或ハ更ニ進ンデ手掌紋ト體質 (Konstitution) 及ビ氣質 (Temperament) トノ關係ニ就テ等ノ研究ニ迄進展シツ、アリ、今ヤ指紋ハ單ニ犯罪人個人識別上ニ應用セラル、ニ止マラズ、更ニ人類學上或ハ遺傳學上ノ研究ニ新領域ヲ開拓セント努力シツ、アル事ハ、吾人ノ等シク刮目シテ其成果ヲ期待スル所デアツテ、殊ニ人種ノ研究ニ從來ナサレタル人類學的身體計測ノ外ニ、血液型検査ト指紋ノ調査ガ並ビ行ハル、ニ至ル事ハ、蓋シ極メテ有意義ナル事デアラウト信ズル。

(二)、指紋人種特異性並ニ指紋係數ニ就テ

此ノ事ニ就テハ古畑教授ガ大正十五年十月十日第二十六回北陸醫學會ニ於テ詳細ニ發表シテ居ラレルガ、更ニ略述

スル事ニスル。人ノ指紋ハ萬人不同デ而モ終世不變ノモノデ一個人ノ有スル指紋ハ其人特有ノモノデアル。之レ指紋法ガ唯一ノ科學的個人識別法トシテ印章ノ代用犯人ノ檢舉ノ如キ方面ニ應用サレキル所以デアツテ自然ガ人間ニ與ヘタル「名刺」ダトモ考ヘラレル。扱テ指紋ハ弓狀紋ト蹄狀紋、渦狀紋ニ、三別サレル事ハ前章ニモ述ベタガ、コノ三者ガ出現スル割合ヲ檢スルニ、同一系統ノ國人ハ其割合ガ殆ド一定シテキルニ拘ラズ、其民族ヲ異ニスルニ從ヒ、其ノ配分ノ比率ガ變化シテオル事ヲ見出スノデアル。

日本人ノ指紋ニ關シテハ司法省ヲ始メ、台灣總督府、及ビ諸大家ニヨリ南ハ台灣ヨリ本州ハ勿論、北ハ北海道、樺太、西ハ朝鮮、支那ニ至ル迄普ク調査セラレテオル。以上諸家ノ報告ヲ見ルト日本人指紋ノ各型ノ出現率ハ地方ニ依ツテ多少ノ相違ハアルガ略ボ一定シテオル事ガワカル。

古畑教授ハ渦狀紋ノ%ヲ蹄狀紋(甲種蹄狀紋ノ%ト乙種蹄狀紋ノ%ヲ加ヘタモノ)ノ%デ割ツタ商ニ¹⁰⁰ヲ乗ジタモノヲ「指紋係數」ト名ケW^Uヲ以テ表ハシテ居ラレル。今日マデ調査セラレタ日本人ノ指紋係數ヲ見ルト市ヶ谷監獄デハ^{85.59}久保教授ガ朝鮮ノ永登浦監獄ニ入監中ノ日本人³⁰⁰人ニ就テノ検査ヲ見ルト^{91.68}トナリ、之ハ今日迄日本人ニ就テ報告セラレテキルモノデ、最高ノ指紋係數ヲ示シ、藤井氏ガ女囚¹⁰⁰⁰人ニ就テノ成績ハ^{73.09}デ岸孝義氏ガ金澤ノ小學兒童ニ就テ檢ベラレタ所ニヨルト指紋係數ハ^{67.79}デ以上諸家ノ報告ニ比スレバ餘程小サクナツテキル。扱テ之等ノ指紋係數ヲ比較シテ見ルト、日本人ノ指紋係數ハ大體⁷⁰⁻⁹⁰迄ノ間デ地方ニヨツテ多少ノ差違ノ存在スル事ハ豫想ニ難クナイ。

司法省ノ報告ハ全國ノ人カラ得タ平均値ト思ハレルカラ若シ指紋係數ガ同一國人ニ就テ一定スルモノデアルトスルナラバ、各刑務所ニ於ケル報告ハ大體ニ就テ一致シナクテナライ。然ルニ市ヶ谷監獄ノ成績ニヨレバ其ノ指紋係數ハ^{85.59}巢鴨監獄デ古瀬安俊氏ノ調査シタモノハ^{87.13}兒島三郎氏ガ静岡監獄ニテナシタモノハ^{85.33}藤井藤藏氏ノ報告セラレタ司法省ノ調査ハ^{85.13}トナリ、殆ド一定シテ居ル。コレハ指紋ノ出現ガ人種ニヨツテ略ボ一定シテ居ルモノデアル事ヲ推定スルニ有力ナ基礎ヲ與ヘルモノデアル。

次ニ歐洲人ノ指紋ヲ見ルト日本人ニ比シテ弓狀紋、甲種蹄狀紋ガ多ク蹄狀紋、渦狀紋ニ就テ比較スルト歐洲人ニ於テ蹄狀紋ガ非常ニ多ク渦狀紋ハ少ナイ。英國人ハ蹄狀紋ハ^{69%}、渦狀紋ハ僅カニ^{25%}内外デアル。夫故指紋係數ハ東洋ニ比シテ非常ニ小サクテ英人、ノールウェー人、ポーランド人ハ何レモ³⁸内外デアル。現在知ラレテキル所デハ英國人、ノールウェー人ト、ポーランド人トガ最小ノ指紋係數ヲ示シ、獨逸人ガ約⁴⁶伊太利ハ約⁶⁸デアル。何レニシテモ歐洲人ノ指紋係數ハ⁷⁰以下デアル様ニ思ハレル。之ニ反シ滿洲人ハ渦狀紋ガ多クテ約^{50%}ヲ占メ蹄狀紋ハ^{48%}位デ蹄狀紋ヨリハ少クナイ。從ツテ指紋係數ハ¹⁰⁰以上ニナル。久保博士ノ調査ニ從ヘバ^{106.23}椎野博士、三上氏ノ研究ニヨレバ^{103.96}殆ド一致シテキル。支那人ノ指紋係數ハ^{67.77}デ伊太利人ト略ボ同ジデアル。一口ニ支那人ト申シテモ支那ニハ色々ノ系統ノ民族ガ含マレテオルカラ指紋係數モ地方ニヨリ相違スベキモノト思ハレル。スマトラ人ノ指紋係數ハ^{84.94}デ前印度人ハ^{58.48}ニアス島人ハ^{52.23}アイヌ族ハ指紋係數ハ^{48.61}デ日本人、朝鮮人、支那人ノ指紋係數ト明確ナル差違ヲ見セテ歐洲人型ニ近イ事ハ人類學上今日尙未定ノ種屬デアルト云フ點ニ於テ興味アル問題トサレテキル。台灣總督府ノ調査ニヨレバ台灣在住日本人ノ指紋係數ハ^{78.26}本島人(多クハ福建省ヨリノ移住民)ハ^{72.37}生蕃人ハ^{95.85}デ三者ガ相違シテキルノハ實ニ興味アル點デアル。以上述べタ如ク三種類ノ指紋ノ出現率ハ各人種ニ依テ相違シ、同一人種ニ依リテハ殆ド同一デアリ、蹄狀紋ハ歐洲ニ多ク東漸スルニ從ツテ減少シ渦狀紋ハ丁度反對ノ現象ヲ示シテキル。即チ東漸スルニ從テ増加シ支那人ニ於テ最も多ク出現スル。

以上述べタ指紋係數ハ單ニ渦狀紋ト蹄狀紋トノ比率ヲ現ハシタモノニ過ギズ。弓狀紋、甲種蹄狀紋ト渦狀紋中ノ小分類ヲ全然顧慮セザルヲ以テ、將來ハ全部之等ヲ顧慮シテ數學的考察ト遺傳的研究ニ基イタ正確ナ分類ノ生マル、コトヲ信ズル。古畑教授ハ以上各國ノ指紋係數カラ世界民族ヲ大別サレ即チ⁹⁰以上滿洲人型⁷⁰迄ヲ日本人型⁶⁰迄ヲ伊太利人型³⁰⁻⁵⁰迄ヲ印度人型、⁵⁰以下ヲ西歐人型トサレテ居ラレル。

(三)、本邦各地ノ指紋係數ト生物學的人種係數ニ就テ

(イ)、余ノ調査セル本邦各地ノ指紋係數ニ就テ

晩近人類學の研究ハ頓ニ進ミ、從テ之ニヨツテ新事實ノ闡明啓發セラレタルモノ亦尠シトシナイ。而シテソノ研究ハ多岐ニ亘ツテ居ルガ、今後ノ人類學ガソノ基礎ヲ各種ノ人體形質ノ遺傳ニ置クベキ事ハ疑フノ餘地ハナイ。遺傳學ニ基礎ヲ置ケル人類學ニシテ始メテヨク其科學的價值ヲ充分ニ發揮シ得ルモノト云フベキデアル。夫レ故其研究ニハ祖先ガ有シテ居ツタト略ボ同ジ特徵ヲ現存人種ニ求メル事ガ有利デアル。時ト共ニ變遷スルガ如キ事項ヲ以テ該研究ニ資セントスルトキハ不測ノ誤ヲ招來スル恐れガアル。此ノ點ニ於テ所謂體質人類學ハ人ノ體質ガ一定ノ法則ニ從ツテ遺傳スル限リ重要ナル研究方法ト云ハナクテナラナイ。現存人種ノ身體構造上ノ特異ヲ研究シ又ハ發掘セラレタル骨ノ解剖學的計測ヲ行ヒ、各人種ノ特徵ヲ參酌比較スル事ガ出來ルノハ餘リコノ理由ニヨルモノト思ハレル。指紋並ニ血液型ハ遺傳スルコトニ相違ナキ限リ人類學上ノ研究ニ應用セラル、價值アル事ハ蓋シ想像ニ難クナイデアラウ。指紋ハ其出現率ニ於テ人種の特異性ヲ有スル事ハ既述セル通りデアルガ血液型モ亦各型血液ノ出現率ハ人種ニヨツテ殆ド一定シテ居ルモノデアツテ其ノ分布ノ相違ヲ調査スル事ハ人類學上ニ大切ナ意義ヲ齎スノデアル。我が國各地ニ於ケル血液型分布ノ狀態ハ我が國醫學者ノ努力ニヨリテ大分明カニナツテ來タガ各地方ニ就テノ精細ナル調査ハ行ハレテ居ラナイ。指紋ノ分布ニ就テモ前章ニ述ベタガ如ク唯所々ノ監獄デ調査サレタモノト僅カニ地方的ノ調査ガアルノミデ今述ベタ如キ目的ヲ以テ指紋分布ノ狀態ヲ地方的ニ調査セラレタモノハ未ダナイ。ソレデ余ハ今回司法省指紋部ガ特ニ古畑教授ノ依頼ニ應ジテ司法省保管ノ指紋原紙ニ就テ作製セラレタ本邦各地ノ指紋表ニ基イテ一々各地ノ指紋係數ヲ算出シタノデソノ成績ハ次ノ通りデアル。コノ機會ニ於テ司法省ノ泉二刑事局長、松井行刑局長、正木書記官、指紋部ノ仁科主任ヲ始メ、各位ニ感謝ト敬意ヲ捧ゲル。

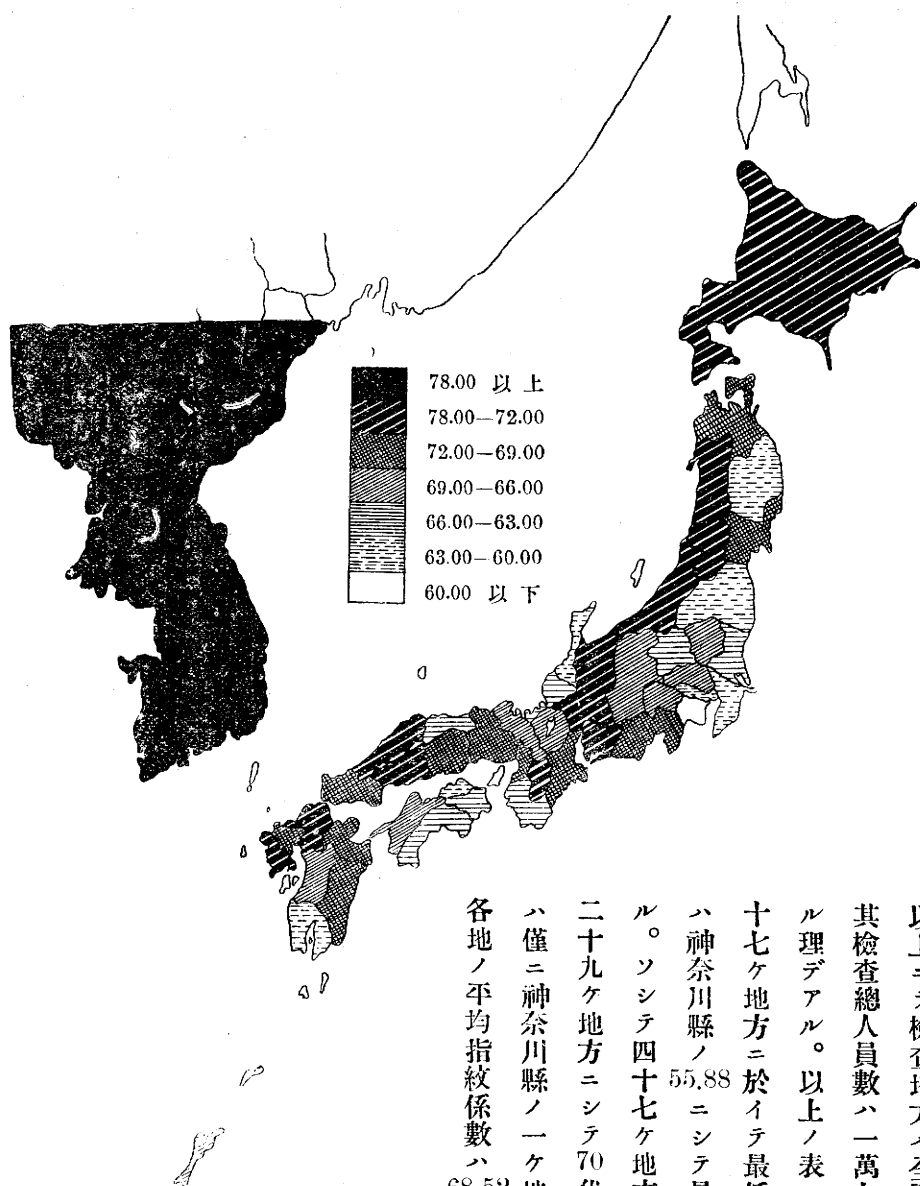
係關ノ紋指ト地生出

郷土別	調査人員	指紋ノ種類價並ニ指紋總數百分比									計
北海道	三〇八	六、三	六、一六	一〇、九	一〇、五	一〇、八	一五、四五	一八、七	二、八三	八四八	
東北區	一、八六六	六、五	五、九	二〇、五	二、三	二五、四	一五、七四	一五、九	二、三六	八五九	
關東區	二、九四四	六、九	五、九	二、五	二、九	二五、七	一五、六三	一六、四	二、六七	八七一	
北陸區	一、二六八	七、九	五、八	三、三	二、三	二〇、三	一四、四〇	一七、〇〇	三、三七	八四八	
東山區	一、〇〇〇	六、五	五、七	二、五	二、三	二、八	一五、五一	一七、五	三、二四	八四六	
東海區	一、三〇二	六、八	五、六	二、六	二、六	二、四	一四、九〇	一七、九	三、八九	八五二	
近畿區	二、八九九	六、九	五、四	二、四	二、五	二、九	一五、二三	一七、六	三、六	八三	
中國區	一、八六六	六、六	五、七	二、六	二、三	二、七	一四、九三	一七、四	三、七	八五四	
四國區	一、四三三	七、六	六、〇	三、三	二、七	二、〇	一五、〇六	一六、〇	三、〇〇	八四〇	
九州區	二、一九九	六、八	五、八	二、〇	二、元	二、四	一五、五九	一七、五	三、六	八四〇	
沖繩區	一、〇六	五、九	五、三	二、〇	二、六	二、三	一五、七三	一八、〇	三、七	八三	
總計	一七、三〇〇	六、六	五、七	二、二	二、四	二、一	一五、四四	一七、七	三、三	八四八	
北海道	三〇八	六、三	六、一六	一〇、九	一〇、五	一〇、八	一五、四五	一八、七	二、八三	八四八	
青森縣	二五八	六、七	五、八一	二、〇	二、三	二、二	一四、九六	一八、三	三、七四	七五〇	
岩手縣	二二三	六、〇	五、九	二、〇	二、三	二、一	一四、四六	一六、四	三、五	八三	
宮城縣	三六一	七、〇	五、九	二、〇	二、三	二、一	一五、四六	一八、〇	三、八〇	八三	
秋田縣	二八二	五、九	五、六	九、九	二、八	二、五	一五、六〇	一八、〇	三、八〇	八三	
山形縣	二八二	五、九	五、六	九、九	二、八	二、五	一五、六〇	一八、〇	三、八〇	八三	
福島縣	三七三	五、九	五、八	二、二	二、〇	二、六	一四、三六	一七、〇	二、九	七五七	
茨城縣	四〇七	六、二	五、四〇	二、〇	二、六	二、二	一六、五	一六、九	二、一六	八三	
栃木縣	三三三	七、〇	六、一六	二、〇	二、三	二、一	一五、八一	一七、六	三、二六	七四四	
群馬縣	三三五	六、三	六、元	二、三	二、〇	二、八	一四、七三	一五、三	二、九	八二	
埼玉縣	三九九	七、四	六、一七	二、一	二、五	二、一	一五、八三	一六、四	二、一七	八二	
千葉縣	四七三	七、五	六、〇八	二、〇	二、五	二、一	一五、八三	一六、四	二、一七	八二	
東京府	七五五	六、五	五、七	二、一	二、六	二、二	一六、六九	一五、〇	二、三	八二	
神奈川縣	三三四	六、三	六、四六	二、〇	二、五	二、一	一六、六九	一五、〇	二、三	八二	
新潟縣	五〇七	七、九	五、九	二、六	二、〇	二、七	一五、一一	一七、五	三、三	八六二	
富山縣	二五九	六、九	五、八	二、三	二、〇	二、八	一四、〇九	一六、一	二、四二	八四二	
石川縣	二六六	八、五	五、〇	二、七	二、三	二、四	一四、四七	一六、二	二、七	八五	
福井縣	二二六	七、五	六、九	二、九	二、八	二、四	一三、一三	一五、八	二、三	八五	

原著 平井 日本人的指紋の研究

[illegible]

	地 方 別	調 査 人 員	指 紋 ノ 種 類 並 ニ 指 紋 總 數 百 分 比					指 紋 係 數	生 物 學 的 人 種 系 數
			弓 狀 紋	甲 種 蹄 狀 紋	乙 種 蹄 狀 紋	計	渦 狀 紋		
沖繩區	沖 繩 縣	106	5.93	5.30	51.12	56.42	37.65	66.72	1.95
九州區	鹿兒島縣	328	6.78	5.89	50.58	56.47	36.75	65.08	1.54
	宮崎縣	163	8.23	4.85	49.16	54.01	37.76	69.91	—
	熊本縣	290	6.03	6.14	48.75	51.89	39.08	71.20	—
	大分縣	388	6.31	6.03	50.20	56.23	37.46	66.62	2.10
	長崎縣	299	6.86	6.09	46.38	52.47	40.67	77.51	—
	佐賀縣	201	6.62	6.17	48.41	54.58	38.80	71.09	—
	福岡縣	530	7.23	5.36	48.21	53.57	39.20	73.18	1.86
四國區	高松縣	287	7.46	7.04	50.00	57.04	35.50	62.24	1.51
	愛媛縣	539	7.31	5.70	49.81	55.51	37.18	66.98	1.75
	香川縣	337	6.56	5.28	51.44	56.72	36.82	65.03	1.70
	德島縣	300	7.30	6.40	50.56	56.96	35.74	62.75	1.57
中國區	山口縣	321	7.26	6.57	48.07	54.64	38.10	69.73	—
	廣島縣	586	6.14	5.87	48.05	53.92	39.94	74.07	—
	岡山縣	574	6.57	5.52	49.56	55.08	38.36	69.64	1.75
	山根縣	214	7.29	4.67	48.37	53.04	39.67	74.81	—
	鳥取縣	191	6.33	5.91	51.56	57.47	36.20	62.99	—
近畿區	和歌山縣	321	7.36	4.96	52.32	57.28	35.36	61.73	1.37
	奈良縣	232	6.25	6.25	47.07	53.32	40.43	75.83	—
	兵庫縣	764	6.83	5.50	49.60	55.10	38.07	69.06	—
	京都府	796	5.89	5.11	49.80	55.26	37.25	71.39	1.47
	大阪府	462	7.49	5.63	49.63	55.26	37.25	67.41	1.73
	滋賀縣	244	6.84	6.27	50.41	56.68	36.48	64.36	—
東海區	三重縣	335	5.70	5.58	48.63	54.21	40.09	73.95	—
	愛知縣	641	6.83	5.65	47.72	53.37	39.80	74.57	1.55
	靜岡縣	325	8.00	5.79	48.95	54.38	37.62	69.18	—
東山區	岐阜縣	342	7.34	5.91	48.01	53.92	38.74	71.85	1.40
	長野縣	476	6.22	5.57	50.02	55.59	38.19	68.70	1.70
	山梨縣	242	5.99	5.54	50.74	56.28	37.73	67.04	1.40
北陸區	福井縣	236	7.58	6.91	50.38	57.29	35.13	61.32	—
	石川縣	266	8.50	5.00	50.35	55.35	36.16	65.34	1.34
	富山縣	259	6.99	5.83	46.51	52.34	40.77	78.04	1.39
	新潟縣	507	7.93	5.90	47.69	53.59	38.48	71.80	1.48
關東區	神奈川縣	314	6.63	6.46	53.44	59.90	33.47	55.88	1.30
	東京府	715	6.58	5.73	52.62	58.35	35.07	60.10	1.48
	千葉縣	472	7.25	6.08	49.89	55.97	36.78	65.71	1.20
	埼玉縣	399	7.44	6.17	49.34	55.51	37.05	66.74	1.80
	群馬縣	315	6.22	6.36	51.78	58.14	35.61	61.22	—
	栃木縣	322	7.10	6.16	49.27	55.43	37.47	67.60	—
	茨城縣	407	6.31	5.40	50.90	56.30	37.39	61.08	1.35
東北區	福島縣	372	5.99	5.80	51.64	57.44	36.57	65.85	—
	山形縣	282	5.36	4.96	48.64	53.60	41.04	76.57	1.24
	秋田縣	361	5.19	5.66	48.89	54.55	40.26	73.80	1.28
	宮城縣	381	7.01	5.93	48.36	54.29	38.37	71.28	1.58
	岩手縣	212	6.09	5.90	51.05	56.95	36.96	64.90	1.52
	青森縣	258	6.67	5.81	49.12	54.93	38.40	69.91	1.27
北海道	北 海 道	308	6.63	6.16	47.20	53.36	40.01	72.27	0.98 (アイヌ)



以上ニテ検査地方ハ全國四十七ヶ地方ニ亙リ
 其検査總人員數ハ一萬七千三百二十人ニ達ス
 ル理デアル。以上ノ表ニテモ明カデアルガ四
 十七ヶ地方ニ於イテ最低指紋係數ヲ有スル所
 ハ神奈川縣ノ 55.88 ニシテ最高ハ富山縣ノ 78.04 デア
 ル。ソシテ四十七ヶ地方ノ中指紋係數 60 代ガ
 二十九ヶ地方ニシテ 70 代ガ十七ヶ地方デ 50 代
 ハ僅ニ神奈川縣ノ一ヶ地方アルノミデアル。
 各地ノ平均指紋係數ハ 68.52 デアル。依是觀之日

本人ノ指紋係數ハ大
 體 80-60
 迄デアルト申シ
 テヨロシイ。

コノ調査ニヨレバ
 指紋係數ハ 78.04
 55.88 デ

アツテ從來ノ報告ニ
 比シテ甚ダシク其指
 紋係數ガ低クナツテ

居ル。コレハ古畑教授ノ希望ニ從ツテ指紋原紙ノ選擇ニ當リ出來ル丈ケ各縣ノ人々ヲ公平ニ集メ様トシタカラデアツ
 テ、日本人ノ實際ノ平均指紋係數ヲ定メントスルニハ本調査ハ不適當ナモノデアルコトヲ注意シテ置ク。本調査ハ指

紋係數ノ地方の差違ガアル一定ノ法則ニ從ツテ配列セラレテ居ルコトヲ見ルガタメニ行ハレタモノデアル。コノ目的ノ爲メニハ本調査表ハ全ク余等ノ豫想ヲ立證シテクレタモノデアツテ指紋ノ人類學上ノ應用ノ眞價ガ闡明セラレタモノト云ツテヨイ。

以上私ノ調査セル範圍ニオケル指紋係數ヨリ見レバ北海道及ビ日本海沿岸ニ於ケル諸縣ノ指紋係數高ク、太平洋沿岸ニ於テ低ク且南下スルニ從ツテ漸次低下シ行ク傾向ヲ示シテキル。即チ我が國北部殊ニ北海道及ビ日本海沿岸（山形縣、秋田縣、新潟縣、富山縣）ハ渦狀紋ヲ有スルモノガ多クテ蹄狀紋ヲ有スルモノ尠ク、反之シテ太平洋沿岸ヨリ南下スルニ從ヒ蹄狀紋ヲ有スルモノ比較的多ク渦狀紋ヲ有スルモノガ減少スルヤウデアル。

要之吾ガ國北部地方ニ於テハ（殊ニ北海道及ビ日本海沿岸）太平洋沿岸及ビ南部地方ニ比シ指紋係數高キ事實ハ之ヲ從來研究サレタ本邦各地ノ生物化學的人種系數ト比較研究スルニ其處ニ何等カ或一定ノ關係ノ存スル事ヲ疑ハシムモノデアル。因テ次ニ諸家ニ依リ調査發表セラレタ本邦各地ノ生物學的人種系數ヲ掲ゲテ指紋係數トノ比較關係ニ對スル私ノ考察ヲ述ベテ見タイト思フ。

（ロ、生物化學的人種系數ニ就テ）

今日一般ニ同種血球凝集反應ハ英國ノ Schatlock (1899)、奧國ノ Landsteiner (1900-1901) ニヨツテ認識セラレタ如ク論ゼラレテ居ルガ、人間ノ血液ヲ混合スル時ニ或ル時ハ凝集シ或時ハ凝集セザル事實即チ同種血球凝集反應ノ現象ハ日本及支那ニ於テ十三世紀頃ヨリ知ラレテオツタ事實デアツテ、我國ニハアイヌ時代ノ太古ヨリ合血ノ法アリ、支那ニハ滴血ノ法、滴骨ノ法アリテ、コレニヨリテ近親者ノ鑑別ニ應用セラレテ居ツタ事ハ世界最古ノ法醫學書洗冤錄（宋惠父編、我が後深草天皇寛治元年西曆千二百四十七年）無冤錄（元ノ王與著、我が花園天皇延暦三年西曆一三〇八年、及ビ河合甚兵衛尙久著、無冤錄述、元文元年西曆一七三六年）等ニ記載セラレテ居ル所デアツテ法醫學上ニモコノ方法ハ實行セラレテ居ツタモノ、如ク、史的傳説ハ多數ニ我が國ニ傳ヘラレテ居ル。何事モ新事實、新發見トダ

ニ云ハ、歐洲ニ限ルト思フ我ガ國人ノ冥ヲコノ際余ハサマス事ヲバ注意シテ置キタイ。

次デ Schatcock, ノ認メタノハ假性血球凝集反應デアツテ眞性ノ血球凝集反應デハナカッタシイ。同種血球凝集反應ヲ確定シテ今日ノ血液型分類ニ科學的基礎ヲ與ヘタノハ Landsteiner ノ効績デアル。彼ハ一九〇一年 22 名ノ健康人ノ血液ヲ検査シテ之ヲ A, B, C, ノ三種ニ分類シ、コノ現象ヲ證明センガタメニ、二個ノ凝集原ト二個ノ凝集素ノ存在ヲ假定シタ。其後 Moss, Jansky v. Dungen, u. L. Hirschfeld 氏等ノ研究ニヨリ、人血液ヲ四種類ニ分類スルニ至ツタ。一九一〇—一九一二年 von Dungen u. Hirschfeld 氏等ガ 72 家族³⁴⁸人ノ検査ニ基ヅキ、コノ血球凝集性 A 及ビ B ハ遺傳スルコトヲ確定シタ。同種血球凝集反應ヲ科學的ニ認識シ、コレニヨツテ人血液ヲ三種ニ分類シタモノハ全ク Landsteiner ノ効績デ今日コレヲランドスタイナー反應ト呼ブニ至ツタノデアルガ、コノ特異ナル現象ヲ認メ、コレヲ近親者ノ鑑別ニ使用セントスル思想ハ支那及ビ我國ニハ十三世紀ノ頃ニ胚胎シ實際上ニモ應用セラレテ居ツタ事ハ注目ニ價スル事デアル。然シ K. Landsteiner, Jansky, Moss 氏等ノ外ニ血液型研究其後ノ發展ニ最モ貢獻シタノハ von Dungen u. Stinsfeld, 夫妻ヲ舉ゲナクテハナラナイ。一九一九年 Hirschfeld 夫妻ハ當時世界戰爭ノ爲メニマケドニアノ大平原ニ集ツタ世界十六ヶ國ノ兵士ニ就テ其血液ヲ同種血球凝集反應ニ依ツテ四型ニ分類シ血液ニ A ナル凝集原ヲ有スルモノト B ナル凝集原ヲ有スルモノトノ比率 $\frac{A}{B} = \frac{A+AB}{B+AB}$ ヲ生物化學的人種系数 (Biochemical Racial index) ト命名シ、氏ハ此等ノ人種系数ヲ三型ニ分チ $\frac{A}{B} = 2.5$ 以上ナルモノヲ歐羅巴型 (European Type) $\frac{A}{B} = 2-1.3$ ト中間型 (Intermediate Type) $\frac{A}{B} = 1$ 以下ヲ印度亞細亞型 (Indo-Mauchurian Type) ト定メタ。ソノ後 Ottenberg 氏ハ Hirschfeld 氏ノ分類ハ單ニ血球ノ A 凝集原ト B 凝集原トノ比率ニヨルモノデアツテ A 及ビ B ナル凝集原ヲ有セザル O 型 (I 型) 血液ノ割合ヲ無視シテキル故ニ O 型血液所有者ノ大部分ヨリナルアメリカインディアン、オーストラリア土人、フィリッピン人等ニ對シテハ此ノ分類ヲ適用スル事が出來ナイト云フ理由ノモトニ、氏ハ A 型 (II 型) B 型 (III 型) O 型 (I 型) ノ三種ノ割合カラ世界人類ヲ歐洲型、中間型、湖南型、印度、滿洲型、亞弗利加、南亞細亞型、太平洋亞弗利

加型ノ六種ニ分類シタ。Gnyder 氏(一九二六年)ハ Ottenberg 氏ノ亞弗利加、南亞細亞型ヲ亞弗利加マレー型ト改メ更ニオーストラリア型ヲ加ヘテ七ツニ分類サレテキル。古畑教授ハ湖南型ハ日本人ガソノ代表的ノモノナレバ、之ヲ日本型ト改稱スベキモノナリト第三回汎太平洋學術會議デ提議サレテ居ラレル。要之歐羅巴ニ於テハA凝集原所有者ガ多ク亞細亞方面ニ來ルニ從ヒ次第ニ減ジ反之B凝集原所有者ガ歐羅巴ニ尠ク東漸スルニ從ヒ多クナル傾向ヲ示シテキル。血液型ニヨル生物學的人種系數ハ V. Dungen u. Hirschfeld ノ $\frac{A+AB}{B+AB}$ ガ一般ニ使用セラレテキルガ其他ニモ多クノ人ニヨツテ色々ノ方法ガ提唱セラレテキル。Leveringhaus ハ血清中ニBヲ有スルモノトAヲ有スルモノトノ比ヲトリ之ヲ Serologische Gruppen index トシテ $I_2 = \frac{O+A}{O+B}$ ヲ以テ表ハシ B. Wischniewsky ハ $I = \frac{O+2A+AB}{O+2B+AB}$ ヲ賞用シ A. A. Mellich ハ $I = \frac{O+A}{B+AB}$ ヲ適當ナリトシモ、氏ノ第二報ニ於テハ Bernstein ノ遺傳式ニヨレバ之ハ $I = \frac{RR+(AA+AR)}{(BB+BR)+AB}$ 、古畑教授等ノ遺傳式ヲ使用スレバ $I = \frac{abab+(Abab+Abba)}{(aBaB+aBab)+AbaB}$ トナルガソノ何レニヨルモ結局 $I = \frac{O+A}{B+AB}$ トナリ血液型ノ各型ヲ顧慮シタ人種系數トナル、其他ニ Wellisch ノ Biologischer Rassenindex 又ハ Serologische Regressionsindex 又 Latkes ノ Serologische Rassen-index 等ガ報告セラレテ居ル。以上述べタ如ク血液型ノ検査ハ今ヤ人種ノ研究ノ有力ナル方法トシテ人類學者ノ採用スル所トナリ獨逸ニ於テハ奧國人類學教室ヲ中心トスル獨逸血液型學會設立セラレ、和蘭、フキンランド、ポルトガル、ポーランド、米國等ニ於テモ血液型ノ調査ハ開始セラレロシアニ於テハレーニングラード人類學博物館ニ血液型調査部ヲ設ケハリコフ科學院ハ常設血液型研究委員會ヲ置き、コノ委員會ヨリハ世界唯一ノ血液型研究雜誌ヲ發刊スルニ至ツタ。

次ニコレ迄既ニ發表セラレタ本邦各地ノ生物化學的人種系數ヲ表記シテ見ルト次ノ通りデアル。(前圖參照)

以上諸家ノ報告セラレタ本邦ノ人種系數ヲ見レバ沖繩、四國、九州、中國方面ニ其系數高ク東漸スルニ從ツテ低下シテ行ク。即チA凝集原ヲ有スルモノガ吾國南部ニ比較的多ク北陸ヨリ東北ニ向フニ從ツテ減少スル。而シテB凝集原所有者ハ東北、北陸方面ニ比較的多ク南下スルニ從ヒ次第ニ少クナル。東北地方ニ於テモ日本海沿岸ハ太平洋沿岸

ニ比シテA凝集原ガ餘程少クテB凝集原所有者ガ多イ。

朝鮮ニ於ケル人種系數ヨリ見レバ日本ニ近キ南朝鮮ニ於テ人種系數高ク北上スルニ從ヒ漸次低下シ滿洲ニ入リテハ奉天附近ニテ更ニ低下シ北京地方並ニ山東省ニ於テ益々低下シテオル。又桐原氏ノ報告ニヨレバ沖繩ヨリ以東南下スルニ從ヒ人種系數ノ低下スル事ハ實ニ興味アル事デアル。

(四)、日本人身長並ニ頭型ノ地方的分布ト指紋分布トノ關係

ペルツ、小金井博士、長谷部博士、松村理學博士、吉田章信氏等ノ研究ニヨツテ日本人ノ身長並ニ頭型ハ地方的ニ差違アル事ガ明カニナリ、日本人ヲ構成スル分子ガ一元的ノモノデナク多元的ノモノデアルトノ意見ヲ持ツテ居ラル、人モ尠クハナイ。松村博士ニ從ヘバ短頭型ハ九州ノ南部、本州ニ這入ツテハ中國カラ近畿地方ヲ貫イテ信濃マデ延ビ、ソレカラ北ノ方ハズツト飛ビ離レテ陸中、羽後モ亦短頭型デアアル。次ニ長頭型ノ方ハ九州ノ西部地方、本州デハ山陰カラ北陸ニ掛ケテノ日本海ニ面スル地方ト關東以北ノ太平洋ニ面スル國々ヲ占メテ居ル。ソシテコレ等兩型ノ中間ニ立ツ中頭型ハ恰モ此等兩者ノ間ニ介在シテ居ルト云フ狀態ヲ示シテ居ル。頭型ニ於ル變異ノ分布狀態ヲ見ルト、九州、中國ヨリ近畿地方ニカケテ變異ハ大キク近畿地方ノ以北即チ飛驒カラ東北地方ニ亘ツテ變異ノ度合ハ小サイ。

變異ハ混合ノ度ガ強ケレバ強イホド大キク單純デアレバアル程小サイトノ事デアル。東北地方ノ中デ陸中ハ變異ノ度合ガ強イコトヲ松村博士ハ指摘シテ居ラル、事ハ余ノ調査ニヨルモ東北地方ガ一般ニ渦狀紋ガ多イニ拘ラズ岩手縣ノミハ獨リ蹄狀紋ガ多クナツテ特異ノ位置ヲ占メテ居ル事ハ興味アル點デアアル。長谷部博士ノ報告ニヨルト身長ニヨリテ地方的ノ集團ヲ區別シ得ルトノ事デアル。即チ鳥取、北海道、滋賀、大阪、和歌山、京都、岡山、長崎、佐賀、岩手ノ諸縣ハ身長ガ一般ニ高ク熊本、鹿児島、大分、香川、新潟、栃木、群馬、埼玉、沖繩縣ハ身長ガ低イ。即チ九州ノ西北部、中國ヨリ近畿ニカケテ身長ハ高ク東北デハ岩手縣ガ身長ガ高イ事ガ注目ニ價スル。九州ノ南部、四國ノ

北部、關東地方ハ一般ニ身長ガ低イト云ハレル。

指紋ノ分布ト血液型ノ分布トノ間ニ密接ナ關係ガアル様ニ見ユルト云フ事ハ前章ニ述ベタ通りデアルガ身長及ビ頭型ノ分布トノ間ニモ密接ナル關係ガアル様ニ思ハレル。何トナレバ身長及ビ頭型ニ於テ著シキ相違ヲ示シテ居ル地方ハ指紋ノ分布ニ就テモ明カニ相違シテ居ル。九州ノ北部ト南部トデハ身長、頭型ニ於テ可ナリ顯著ナル差違アル如ク指紋ニ於テモ著シキ相違ヲ見セテ居ル。長崎縣、佐賀縣、福岡縣ノ如キ九州ノ北部ノモノハ渦狀紋ガ比較的多ク、鹿兒島、熊本ノ如キ南部ニアル縣ハ渦狀紋ガ少ナク蹄狀紋ガ多イ。鳥取縣ト島根縣ハ隣縣デアルニ身長ノ分布ニ於テハ大ニ相違シテ居ル。即チ鳥取縣ハ身長高ク島根縣ハ低イ。指紋ニ於テモ島根縣ハ渦狀紋ノ多イ地方ニ屬シ鳥取縣ハ蹄狀紋ノ多イ地方ニ屬スル。四國ニ於テモ愛媛、香川、德島、高知ノ四縣ハ指紋ノ分布ノ狀態ニハ階段的ノ差違ヲ示シテ居ル。近畿地方ハ一般ニ蹄狀紋ガ多ク奈良、三重、愛知、岐阜ヨリ富山、新潟、秋田、山形縣ハ渦狀紋ガ多イガ新潟縣ト岐阜縣ハ蹄狀紋ヲ有スルモノガ入り込ミ來ツテ兩者ノ混交セルヲ想像セシムル。新潟縣ト岐阜縣ハ指紋ノ分布ニ於テ渦狀紋ノ分布地方ヲ中斷シテ居ル事ハ交通接觸ノ路ニ當ルガ故デアラウト思ハレル。關東地方ハ一般ニ蹄狀紋ガ多ク分布セラレ東北地方ニ於テハ日本海沿岸ニハ渦狀紋ガ分布シ太平洋ニ面セル諸縣殊ニ岩手縣、宮城縣ハ蹄狀紋ノ多イ事ハ歴史ニヨルモ、コノ地方ハ我が國西部地方ト交渉ノ最も多カッタ事ハ明カデアルカラ、渦狀紋ノ多イ地方ニ獨リ蹄狀紋ヲ有スル人が多ク配セラレテ居ル事モ怪シムニ足ラヌデアラウ。血液型、身長、頭型ニヨツテ日本人ニハ地方的集團ガアルガ如クニ、指紋ノ分布狀態モ亦地方的ノ集團ガアル事ヲ見ル。血液型、身長、頭型及ビ指紋ハ何レモ獨立ニ遺傳スル形質デアツテ我國ハ往古ニ於テ此等ノ形質ノ分布程度ヲ異ニシテ居ル數群團體ガアリ、コレガ互ニ混交融合シテ現在ノ我が大和民族ヲ構成スルニ至ツタモノデアラウガ、ソノ數群ノ團體ガ一定ノ系統ヲ追ツテ移動シテ居ルガタメニ、コレ等ノ民族ノ混交ノ程度ニ應ジ今日ニ於テモ此等ノ形質ノ地方的分布ニ差違ヲ示シテ居ルモノデアルト思ハレル。夫レ故、此等ノ形質ヲ系統的ニ且ツ遺傳學的ニ追求調査スル事ニヨツテ大和民族ヲ構成スル數群ノ民

族ノ本體ヲ明カニシ尙其移動ヲモ推定スル事ガ可能トナルモノデハナイカト思ハレル。要之私ハ指紋ノ分布ハ地方的ニ差違ガアリ、然モ之ガ血液型、身長、頭型等ノ分布ト或程度迄密接ナル關係ニアルモノナル事ヲ述ベテ今後ノ研究者ノ御注意ヲ引イテオキ度イ。

(五)、考 察

扱テ以上述べ來ツタ本邦各地ノ指紋係數ト人種係數トガ如何ナル關係ニ於テアルカ今少シ考察シテ見ヤウ。吾ガ國諸家ノ研究スル所ニヨレバ本邦各地ノ血液型検査ニヨル生物化學的人種係數ハ東北地方ニ於テハ南部即チ九州地方ニ比シ低ク日本海沿岸ガ太平洋沿岸ニ比シ其係數ガ低イ。要之吾國南部ニハA凝集原ヲ有スルモノ多クB凝集原ヲ有スルモノ少ク東漸スルニ從ヒB凝集原所有者多クA凝集原所有者ガ減少シテ居ル。又朝鮮ニ於テハ日本ニ近キ南朝鮮ニ於テ人種係數高ク北上スルニ從ヒ漸次低下スルヤウデアル。指紋係數ノ上ニ於テ日本海沿岸ト太平洋沿岸、北海道ト四國及ビ九州(アル一部ヲ除イテ)トハ略ボ正反對ノ位置ヲ示シテキル事ハ血液型ノ検査ニヨル生物化學的人種係數ニ於テ兩者ガ反對ノ兩極ヲナス事實ト全ク符合スルモノデ血液型ヨリ見タル所見ト指紋ヨリ所見トハ大體一致シテ行ク様ニ思ハレル。概括的ニ論ズルト本邦人種係數ガ九州地方ニ高ク東漸スルニ從ヒ低下スル事實ハ以上諸家ノ報告ニヨリ明カデアルガ今少シ精細ニ我國ノ各國ニ就テ血液型ノ分布狀態ヲ調査シタナラバ身長、頭型、指紋分布ノ調査ニヨツテ日本人ノ地方的ニ相違シテキルガ如ク血液型分布ノ狀態ヨリ其系統ヲ分類シ相互關係ヲ明カニスルコトガ出來ルニ至ルモノト思ハレル。各地方ニ於ケル血液型ノ分布ニ關スル正確ニシテ詳細ノ報告ガ出ル事ハ目下ノ所最モ望マシイ事デアル。指紋係數カラソノ分布ノ狀態ヲ觀察スルニ吾ガ國東北地方殊ニ北海道及ビ日本海沿岸ニ於テ指紋係數高ク南下スルニ從ヒ漸次低下スルヤウニ思ハレルガ中國及ビ九州ノ或地方ニ於テ指紋係數ノ比較的高イ地方ガアル。但日本海沿岸ト太平洋沿岸トノミハ血液型ニヨル人種係數ト略ボ正反對ノ位置ニアル事ハ以上私ノ調査ニ於テ明カデア

ル。其他身長及ビ頭型ノ分布ニ於テ地方の差違ヲ示ス地方ニ於テハ指紋ノ分布ニ於テモ明白ナル區別ノ存スル事ヲ示シテキル。

扱テ本邦人種系數ガ九州地方ニ高く、東漸スルニ從ヒ低下スル事實ガ吾ガ日本民族ノ成立ノ昔ヲ辿ル上ニ於テ興味アル問題トサレル今日、指紋係數ガ如何ナル程度迄意味ヲ齎ラスカハ今後ノ研究ニ俟タナケレバナラナイ。

改言スレバ血液型並ニ他ノ身體的特徵ノ人類學的研究ト併立シ其ノ他ノ歴史の根據、考古學の所見、傳説等ヲモ參考トナス事ハ勿論ノ事デアルガ指紋人種特異性ト云フ見地カラシテ臆テハ吾人ノ指紋ヲ比較研究スル事ニ依テ吾ガ大和民族ノ起源如何ト云フ神祕ナ謎ガ解カレル日ガ來ルデアラウ事ヲ信ズルノデアル。

(六)、總括

一、私ハ今回昭和二年調製ノ司法省指紋部ノ統計表ヲ基礎トシ本邦ノ北ハ北海道ヨリ南ハ沖繩ニ至ル四十七ヶ地方ノ指紋係數ヲ調査シタ。

二、以上各地ノ被検査人員ハ一萬七千三百二十人、検査指紋數十七萬三千二百個デアル。

三、日本人ノ指紋係數ハ僅ニ地方的ノ差違ガアルガ概括的ニ云ヘバ各縣殆ド一致シテ居ル。大體⁸⁰⁻⁶⁰迄デ古畑教授ノ提唱セラレタル日本人型ニ略ボ一致スルモノデアル。

四、私ノ調査シタ日本人一萬七千三百二十人ノ平均指紋係數ハ^{68.52}デアル。

五、吾國南部地方ニ於テハ一般ニ指紋係數低ク東北地方ニ進ムニ從ツテ指紋係數ハ高クナル。殊ニ太平洋沿岸ニ比シ北海道及ビ日本海沿岸ハ指紋係數遙カニ高く太平洋沿岸ヨリ南下スルニ從ヒ漸次低下スル傾向ヲ示シテキル。即チ九州ノ西北部、中國ノ一部(島根、廣島)奈良、三重、愛知、岐阜、富山縣カラ吾ガ國北部地方殊ニ北海道及ビ日本海沿岸ハ渦狀紋ヲ有スルモノガ多クテ蹄狀紋ヲ有スルモノ尠ク反之太平洋沿岸ヨリ南下スルニ從ヒ蹄狀紋ヲ有スル

モノ比較的多ク渦狀紋ヲ有スルモノガ漸次減少スルヤウデアル。蹄狀紋ノ多イ地方ハ九州ノ南部(鹿児島、熊本縣)近畿地方(滋賀、京都、和歌山、福井)、中國ノ一部(鳥取、岡山)、四國ノ東南部及ビ關東地方ト東北ノ太平洋沿岸ノ岩手、宮城縣等デアル。

六、我が國ニ於ケル指紋ノ分布ト血液型ノ分布ト頭型及ビ身長ノ分布トノ間ニハ密接ナル關係ガアル様ニ思ハレル。
七、指紋ハ遺傳スルモノデアツテ其分布ノ割合ハ同一民族ニ於テハ殆ド一定シ居ルモノデアルカラ指紋ノ調査ハ血液型ノ検査及ビ他ノ人類學ノ計測ト相俟チ人類學ノ研究ノ新分野ヲ開拓シ民族ノ根本的考察ノ上ニ大ニ參考トナルモノデアルト信ズル。

文 獻

- 1) T. Furuhashi (古畑種基) : 指紋人種特性性並ニ指紋係數ニ就テ、日本之醫界、第十六卷、第九十三號、大正十五年一月二十四日發行。第二十六回北陸醫學界報告(大正十五年一月)。自警第九卷、第九十九號(昭和二年一月)。臺法月報(第二十一卷)、第二號、二十六頁(昭和二年二月)。
- 2) T. Furuhashi (古畑種基) : The Difference of the index of Fingerprints according to Race. The Japan Medical World, June, 1927. Vol. VII. No. 6.
- 3) T. Furuhashi. 血清學ヨリ見タル日本民族及ビアイヌ族、日本學術協會報告、第一卷、大正十四年發行。
- 4) T. Furuhashi. 血清學の見地ヨリ見タルアイヌ、人類學雜誌、第四十二卷、第三號、八十九頁(昭和二年三月發行)。
- 5) T. Furuhashi. ランドスタイン氏反應ニヨル紀州地方人ノ血液四型ノ分布率ニ就テ。内外治療第二年、第五號、(昭和二年五月發行)。
- 6) T. Furuhashi. 人種點ヨリ見タル日本民族ノ起原並ニ移動、第六十一回金澤醫學演說、(昭和二年六月二十四日)抄録十全會雜誌、第三十二卷、第七號、千百拾頁、日本醫界第十七卷、第五十六號、頁、(昭和二年七月十三日發行)。
- 7) T. Furuhashi. Über die Vererbung der Blutgruppen. Verhandlungen der Sündigen Kommission für Blutgruppenforschung (Ukrainisches Centralblatt für Blutgruppenforschung 1927. Bd I H. 3/4)
- 8) T. Furuhashi. On the Heredity of the Blood Groups. The Japan Medical World Vol. 7. No. 7. July 1927.
- 9) T. Furuhashi. On the Heredity of blood groups. Verhandlungen des V. internationalen Kongresses für Vererbungswissenschaft. Berlin 1927. Bd I. P. 705- P. 735.
- 10) T. Furuhashi. The blood groups distribution of Ainu, Formosan aborigines and the inhabitants of Micronesian Islands.
- 11) T. Furuhashi. The distribution of the blood

- Groups of the Japanese. 以上三篇第三回萬國人類學會ニテ發表、24/IX 1927. 12) **T. Furuhashi and Kishi** (岸) : A study on the geographical distribution of the blood groups of the Japanese. 9/Nov. 1926. Transaction of the 3rd Panpacific Science-Congress. 13) **T. Furuhashi and Kishi**. On the biochemical racial index of the Japanese in the Hokuriku district. (a) Transactions of the 6th Congress of F. E. A. T. M. 1925. Vol 1. P. 119. (b) The Japan Medical World. Jan. 15, 1926. Vol. VI. No. 1. (c) The Journal of Immunology. Vol. 12 No. 2. P. 83-91. Aug. 1926. 14) **T. Furuhashi, K. Ichida and T. Kishi**. On the heredity and biochemical Structure of human blood. New theory on heredity of blood groups. The Japan Medical World, 1927. Vol. VII No. 1. 15) **K. Hasebe** (長谷部言人) : 壯丁ノ身長ヨリ見タル日本人ノ分布、東北醫學雜誌、152頁 - 160頁、大正六-七年。 16) **T. Kishi** (岸孝義) : 樺太土人ノ生物學的人種係數ニ就テ、金澤醫科大學十全會雜誌、大正十四年十一月一日發行。 17) **T. Kishi**. 本邦各地ノ生物學的人種係數ニ就テ、金澤醫科大學十全會雜誌、昭和二年八月一日發行。 18) **T. Kishi**. 低溫ニ於テ發現スル血球凝集反應ニ關スル研究、金澤醫科大學十全會雜誌、大正十五年、四月十日發行。 19) **T. Kishi**. 雙胎兒指紋ノ研究、金澤醫科大學十全會雜誌、昭和二年七月發行。 20) **T. Kishi**. 指紋ニヨル年齡ノ推定、社會醫學雜誌、大正十五年五月。 21) **T. Kishi**. 同種血球反應ニヨル人血液四型ノ分類及北陸地方ノ人種係數ニ就テ、金澤醫科大學十全會雜誌、第三十卷、第九號。 22) **Y. Koganei**. (小金井良精) : 人類學上カラ見タル日本民族、人類學雜誌、第四十三卷、第四號、昭和三年四月發行。 23) **Y. Koganei**. (小金井良精) : 人類學研究、(單行本)、大正十五年二月發行。 24) **N. Masaki** (正木信夫) : 日本人指紋ノ研究(乙種蹄狀紋ノ隆線數ニ就テ)、金澤醫科大學十全會雜誌、昭和三年四月一日發行。 25) **A. Matsumura** (松村瞭) : 人類學上ヨリ日本民族、日本學術協會報告第一卷、大正十四年。 26) **A. Matsumura**. On the Cephalic Index and Statue of the Japanese and their Local Differences. A Contribution to the Physical Anthropology of Japan. Journal of the Faculty of Science. Imp. University of Tokyo. Vol. I. part. 1. March. 1925. 27) **K. Yoshida & k. Fujita** (吉田寛一、藤田潔) : 指紋ノ遺傳學的研究、社會醫學雜誌、第四八〇號(昭和二年一月)。 28) 司法省指紋部編纂 : 出生地ト指紋價值(昭和二年四月調査)。